

## 編集後記

ここ数年来、グローバル社会やグローバル化など、「グローバル」と言う語をよく耳にする。外国語がカタカナ表記されて日本語の中へ入り込んで来る場合、よくわからない表現が多いが、このグローバルという語はその最たるものであろう。国際化とか国際社会という語も、実体がなくつまみ所のない表現であるが、多言語社会への寛大さは感じられる。それよりもわかりにくいのがグローバルである。地球規模で物事を考えよう、国の境界を軽々と越えよう、ということだろうか。

それはそれでいいが、常に言葉の壁がその障害となる。壁をひとつ越えても次の壁は越えられないことがある。世界には何千という言語が話されているのだから、当然のなりゆきとして、どこでも通じる言語がひとつ必要となる。現状では英語ということになるだろう。英語によって意思伝達の壁が越えられるなら、それもそれに越したことはない。

外国語に関わる動向は社会の諸事情に左右されやすい。これからの時代まず～語だというように社会事情に左右されてとかく言語に優先順位を付けたがるのが世の常である。景気がよければ外部思考が働いて、行ったことのない国を訪ねたり、馴染みのない言葉に関心がよせられたりする。韓流ドラマが人気となれば韓国語、サッカーが流行ればスペイン語となる。動機は何であれ、異言語にふれ異文化を受け入れる多言語社会は素晴らしい。ただ異言語は常に言葉の壁となる可能性を抱えている。言葉の壁を取り除くのがグローバル化の一面であるならば、多言語共存とグローバル化はひとつ間違えば相矛盾することにもなる。言語が違うからこそ壁も越えてみたくなる。異なる世界が広がるからこそ境界も越えてみたい。そんな未知なる物へのあこがれを支える刺激的で楽しいグローバル化であってほしい。

世間の流れに関わらず、地球上に何千とある言語は、それぞれが豊穡にして同等である。研究対象としての価値は等しくある。そんな研究を支えるのが言語研究センターであり、この紀要であってほしい。(kk)